

# 「生きる」という事

小林暉親

タッタッタッタと、早い子供達が飛び込んで来た。「お早う」もそこそこに、もう四方八方、それぞれ好きな遊具に取りついて、遊び出している。その後からのんびりと、お母さん方が、ベチャクチャとおしゃべりしながらやって来た。今日も又、にぎやかな一日になりそうである。

と、そのうち、駐車場の方から、聞き慣れない奇声が、聞こえてきた。そちらの方を見ると、今日、見学予定のK君と、お母さんと、妹の三人が、何かもみあっている。お母さんは、しきりにK君の手を引っ張って、門の方へ来ようとするが、K君は頑として来ようとせず、奇声をあげている。妹の方は、おびえて母親にしがみついている。そこで私が、自

己紹介方々、「お早うございます」と、寄って行くと、自動車から、お父さんが降りていらした。私が「K君、お早う、どうしたの？」と聞くと、お母さんが、K君は、何時も初めての場所は、入りたがらない事、特に今日は、お父さんが車に残っていたので、もっと車に乗っていたらしい事、などと話して下さった。(お父さんは、K君達を送って来ただけで、すぐ会社に行く予定だったとの事)しかし、K君の様子に仕方なくお父さんも、K君を抱っこして園の中に入り、しばらく、K君の様子や、親子教室について、一緒に話す事にした。

御両親の話によると、K君は、二歳になっても言葉が出なく、呼んでも振り向かないので心配になり、市の言語治療室へ相談に行きかけたが、近所のお医者さんから、東京の病院を紹介してあげるから、と言われ、言語治療室へ通うのはやめ、紹介されたB病院へ、毎月二回、通う事にした。(K君、二歳三か月)その病院は、医師の他に、セラピストがいて、母子関係理論をもとに、子供の相手や、親への指導をしてくれた、との事。しかし、一年半近く通ったが、最近、とてもそのやり方に疑問を感じ、又、お母さんが、心身共に疲れき

つてしまつたので、思いあまつて、もう一度、市の言語治療室へ相談に行つたところ、こちら（親子教室）を紹介されて来た、との事であつた。

B病院での指導とは、K君の言葉の出ない原因は、母子関係が育つていない事からきているもので、まず、母子関係をしっかりと育てる事から、始めなければいけない。その為には、生活全体を、K君中心にして欲しい。そこでまず、K君専用の部屋を一部屋用意し、その部屋には、タンスの他は、何も置いてはいけない。そして、その部屋の中に、一日中親子で居る事。特にお母さんは、常に一定の場所に坐つていなければいけない。そして、同じ所を見つめていて、子供が呼びかけようと、指さしをしようと、反応してはいけない。視線を合わせたり、語りかけてもいけない。たとえ、噛み付いてきても、表情を変えてはいけない。又、躰ようとしてもいけない。排泄はオムツをさせ、オムツの中に大小便をしても、すぐ変えてはいけない。食事は親が食べさせる事、お母さんが、トイレに行く時や、やむをえず、台所仕事等する時は、必ず、おぶつてしなければいけない。部屋の窓を開けてもいけない（風が入つて刺激になり、親子関係をつくる邪魔になる、という主旨）。外出は出来るだけ避ける。子供を叱

るのは、もつての他である、等々の内容であつた。

このような指導に対し、当初は御両親も、それで我子が話せるようになるならと、両親協力しながら頑張つてきたが、半年、一年過ぎてても同じような指導であり、子供もあまり変らず、特に最近、常におんぶで、母親が、心身共に、非常に疲れてきた事、三歳半になつても、まだ一向に大小便は教えず、段々と子供は外に出たがるようになり、このまま、他の子と遊ばせないでよいのだろうか、幼稚園や学校に入れるようになるのだろうか、又、下の妹も二歳になるが、こんな生活で、悪い影響を与えないだろうか、等々の心配がつつてきたとの事であつた。そこで両親で話し合つた結果が、今日の親子教室の見学になつたのである。

私は、この話を聞きながら、思わず、寒けを覚えた程である。何故なら、人の一生でも、本当に一番大事な二―三歳の時期に、親からろくに言葉かけもされず、呼びかけても答えてもらえず、目もあわせてもらえず、一日中狭い部屋に閉じ込められ、友達も得られず、ただ、存在していただだけのK君、そして、K君以上に、正常な妹さんの発達まで、阻害され、もし、この一年半の空白が、子供達の一生に大きな傷を与え

たとしたら……。生きている人間、特に発達している子供達をみつめる能力のない人間（セラピスト）が、どんなに一つの理論が正しく、障害のある子供に役立つものであったとしても、生半可な知識と経験のもとに、子供達の障害の治療どころか、逆に発達をゆがめてしまうとしたら、こんな恐ろしい事はない。子供は生きてるのであり、子供に理論を適用しても、理論に子供をおしこんでは、決してならないと思う。

しかし、そんな私の中のつぶやきを、両親に告げるわけにもいかず、とりあえず、当親子教室は、発達に何らかの問題のあるお子さんと、お母さんが、お弁当を持って週二日遊びにくる所で、子供は、自由に、思いきってたくさん好きな遊びをし、その間、お母さんは、他のお母さんとおしゃべりしたり、子供の障害について学んだり、子供と遊んだり、楽しく過しながら、時々、職員とお子さんの事について話し合いをし、日常生活での接し方や、将来について相談する所です、と説明する。そして、こんな所でよかったら、何時でもいらっしやい、と話をし、後日、入園に関して、返事を頂く事とした。

御両親はあまりに、B病院でのやり方と違う為、しばらく迷われたようだが、数日後に申し込まれ、翌日から元気に通

う事になった。（三歳八か月）

最初の日には、あんなに愚図ったK君が、今日は嘘みたい  
に、大人しく入って来た。登園して、まず最初に私がお母さん  
にお願いした事は、ここではどんなに床や、ジュータンを汚  
してもよいから、オムツをはずして、おしりを軽くしてあげ  
る事、子供が、指さしやお母さんに寄って来たら即座に応  
じてあげる事、たくさん子供と遊ぶ事であった。K君の最初  
の頃の様子は、まず、子供らしい可愛いらしい表情がなく、  
おもしろしをしても、全く表情（不快の）の変化もなく、氣に  
いらないと、お弁当をひっくりかえしたり、他の人が妹に働  
きかけると、まるで自分の玩具をとられるかのように、妹を  
つかんで、噛んだり髪の毛を引っ張ったりして離そうとしな  
かったり、母親に甘える様子もなく、又、何かでじゅくじゅ  
ぶ事もなく、ただ、やたらに怒って、奇声をあげるといっ  
た、状態だった。無論、その目つきは険しく、親子で楽しく  
遊ぶ、などという雰囲気ではなかった。その為、お母さんの  
緊張がかなり高くなってきた。そこで、再度、お母さんと次  
のような話し合いをした。

まず、K君は、初めての集団生活で、あまりに今までの生

活環境と違うので、びっくりしている事、そして、それ自体（イライラ・奇声）はそのうちおさまる事、むしろ大事なのは、お母さんと楽しく遊べていない事が問題である（K君は、お母さんより、他の母親に寄っていく事が多い）。母子関係とは、ただ親子が傍に居ればよいのではなく、子供が、親を必要と思った時にすぐ応えてくれる事により、親に対して、親しみと安心感を持ち、段々と、親を好きになり、同時に親も、子供の仕種が可愛くなるという、相互の好ましいという感情交流が豊かになり、段々と愛情が育っていく事が、母子関係がつく、という意味である事。

又、K君の様子を見ると、遊びに持続がなく、おどおどして、どう遊んでいいか、遊び方がわからない、遊びたいという内側からの気持が、弱いように見受けられる。が、これは発達にとって、とても大変なマイナスである。というのは、子供にとって、遊ぶ、という事は、大人が仕事の合間に、遊ぶ、のとは違って、生きていくという、生活そのものである事、どんなに親が、着物を着せ、おしりの始末をし、食事を食べさせたとしても、その子供が、自発的に、生き生きと遊ばない限り、生きていく、とは言えない事、従って、どう、親子関係を育てながら、K君なりの遊びを育て

あげるかが、今一番大事な事である事を説明する。

その為に、まず、今、御両親がなすべき事は、徹底して子供二人と遊んであげる事、特に体を触れあつての遊びが大事である。例えば、グルグル回すとか、一緒にトランポリンやエアートランポをするとか、親子体操をするとか、くすぐりっこをするとか、毛布を使つてのゆさぶりや、すもうをとるとか等々。何よりも親が楽しく遊んでみせ、その中にK君を無理なく（僕もやってみたい、という気を起こさせる）引き入れ、徹底して、親子で遊んで欲しい事を、お願いする。

すると、早速翌日からお母さんは、これまでの素敵なスカート一の服装から、一転して、体操姿で登園するようになり、どろんこ遊びでも、かけっこでも、体操でも、何でも子供と一緒に、汗を流して遊ぶようになって下さったのである。同時に家でもお父さんが、仕事から疲れて帰ってきてても、すぐ、すもうや、毛布遊びや、グルグル回しや、ふざけっこなどをして、どんどん働きかけて下さったのである。

そして、このような御両親の努力の成果が、今まで、おもらしをしても、全く反応のなかったK君が、不快な表情をするようになり、段々とお母さんが好きになって、離れなくなり、登園してくると、ニコニコして入ってくるようになり、

少しずつ、少しずつ色々な物事に興味を示すようになり、又、まだ意味ははっきりしないが、言葉も増えてきたのである。こうして、子供が段々とよくなってくると、親も嬉しくなり、益々、我子が可愛くなってきたようである。

そんな或る日、御両親の方から、面接の申し込みがあった。それは、来年、保育園（障害児保育として）に入れるでしょうか、という事であり、もし入れなければ、B病院での一年半が悔やまれる、という事であった。そこで私は、「B病院での指導の全てが、間違っていた訳ではなく、その一部のプラスの面が、今のK君の成長を助けている所もあり、それに、大事なものは、過去を悔む事ではなく、今、K君に何が必要で、家族として何ができ、そして、これから何をしておくかを、一緒に考えていく事が大事ではないでしょうか。そこでこれからの方向として、もう大分、K君がお母さんを好きになってきたので、少しずつ、将来、普通児集団の中に入れるよう、色々なルールを教えていく事、これまでのように、大人がリードする遊び方ではなく、一人で、どんな好きな遊びをさせて、K君の内面の生活を充実させてあげる事。そして、それらの結果として、来年の保育園を考えましょう。又、それまでのK君への接し方の注意として、これま

での大人の側からのK君への働きかけを、少しずつ、K君からの反応・合図を受けて、応じていく程度にしていく。そして、出来るだけ、K君の自発を大切に、K君の内面が見える親になって欲しい事などを話し合う。

タッタタッタと、最初の子供が飛び込んで来た。K君である。先生達が「K君、お早う」と言うと、ピヨコン、と頭を下げ、ニコニコとして、先生達の顔を見る。今日も、御機嫌なようだ。この頃は、すっかりしゃべる言葉も多くなり、何よりも怒る事がなくなった。そして、何にでも実によく遊んでいる。そんな時のK君の目は、生き生きと輝いている。本当に、自分の力で「生きている」という感じである。毎日毎日が楽しそうなK君。何よりも、目がとってもかわいらしくなったK君。一回り大きくなったK君。

後から、他のお母さん達と、ベチャクチャしゃべりながらやって来たK君のお母さんに、「この頃、お母さんの方が御機嫌ネー」と例の如く、私がかからうと、「エヘヘ」と、まんざらでもなさそう。何故なら、この四月から、保育園に入れる事が内定したからである。（八千代市立・親子教室）